

<報 告>

日本における郭沫若『女神』の研究

岩 佐 昌 暲

はじめに

今年(2011年)は郭沫若(1892 - 1978)¹⁾の『女神』が刊行されて、ちょうど九十年目にあたる。この節目を記念して中国では「《女神》与20世紀中国文学學術研究会暨郭沫若研究青年論壇」(『女神』と二十世紀中国文学學術研究討論会並びに郭沫若研究青年フォーラム)なる学会が開催された²⁾。本稿はこの学会での報告原稿に、若干の修正増補を行ったものである。

1. 『女神』とその文学史的位罫

『女神』は1921年8月5日、創造社叢書第1種として、上海泰東書局から出版された³⁾。「序曲」を含め、全部で54首の詩と「女神之再生」など3編の詩劇を収めている。その最も早い作品がどれであるか、諸家の説は必ずしも一致しない。郭沫若自身は「死的誘惑」、「新月与白雲」、「離別」、「Venus」、「残月黄金梳」の5首を岡山時代の作と書いている。陳永志の詳細な考証によれば、これら5首の作詩年代は16年

-
- 1) 郭沫若(1892 - 1978)は四川省楽山の出身。14年日本に留学、一高特設予科から岡山の第六高校を経て18年九州帝国大学医学部に進み、23年卒業したが、医者にはならず文学に従事する。『女神』は21年彼が九大在学中に出版した詩集で、その詩人としての地位を確立した作品集である。郭沫若は同年、日本留学生による文学グループ創造社を結成し、文学活動を開始、中国ロマン主義文学の旗手となっていった。26年国民国家建設を目指す北伐軍に参加、総政治部副主任に任じた。27年3月反共的立場を露骨にしていく蒋介石を批判して、彼と袂を分かち、28年日本に亡命、37年中国に帰国するまで千葉県市川に住む。亡命時代は特高警察の監視下で生活しつつ、文字学、古代思想などの研究に打ち込み、それぞれの分野で優れた業績をあげた。37年日中戦争が勃発するや秘かに日本を脱出して帰国、抗日の戦いに身を投じて、文化界の抗日の指導者として活躍した。新中国成立後は副総理、中国科学院長に任じた。66年文革開始直前に、自分の過去の業績を全否定するような「自己批判」を行ったと伝えられ、それが政治的な危機を乗り越えるための保身と受け取られたこともあり、以後急速に文学者としての影響力を失っていった。78年6月逝去。享年87歳であった。
- 2) この学会は中国郭沫若研究会、西華師範大学の共催で2011年10月28日-31日、四川省南充市西華師範大学で開催された。
- 3) 陳永志『《女神》校釈』華東師範大学出版社、2008年9月、によれば、この日付は初版奥付によるもので、実際には8月15日に出版されたという(8頁)。

であり、これを定説とすれば、『女神』には16年から21年までに書かれた作品が収録されていることになる⁴⁾。ただ中国の大学用文学史教科書でも『女神』収録作品の上限をいつにするかは記述の一致をみていない⁵⁾。

『女神』は出版されるや直ちに大きな反響をよんだ。姜涛は種々の資料を引きながら「多くの後に新詩人になった人たちが『女神』を読んだことで新詩に近づいた。その影響力は一般の文学青年の外にまで広がっていた。詩人の陳南士は市場で一人の物売りまでが『女神』を捧げ読んでいるのを見かけている。(中略)ある調査に依れば、20~30年代、中学生が心中最も敬服していた中国作家は郭沫若だった」と書いている⁶⁾。『女神』はその後も再版を重ね、1920年に出版された中国最初の白話新詩⁷⁾(=現代詩)たる胡適の『嘗試集』(『実験詩集』)とともに、中国現代詩史の開拓的な詩集となった。

中国で刊行されている文学史は、少なくともこれまでのところ、『女神』を「中国現代詩歌史上最も重要な詩集の一つ」「草創期の中国現代詩歌の基礎をきずいた作」(孔慶東⁸⁾)、「中国現代詩歌史上最も偉大な新詩集」(朱光燦⁹⁾)など、最大級の賛辞で評価している。現代中国における郭沫若の評価はさまざまに揺れ動いているというのが実情であり、『女神』の文学史的な位置づけが「最も重要」、「最も偉大」という評価をいつまで保ち続けられるかは分からない。しかし、それが「草創期の中国現代詩歌の基礎をきずいた」詩集だという評価は今後も決して揺るぐことはないだろう。なお、日本における『女神』の文学史的な位置づけはおおむね中国のそれを踏襲している。

2. 郭沫若はいつから学術研究の対象となったか?¹⁰⁾

もともと日本の中国文学研究者が文学研究の対象として郭沫若を取り上げるようになるのは新中国成立後の1950年代からである。それは、これまで弱小国家・遅れた国家とみなしてきた中国が、社会主義革命を成し遂げ、敗戦に打ちひしがれ、自信を

4) 陳永志「《死的誘惑》等五首的写作日期考辨」, 前注3)『《女神》校釈』所収(256-262頁)。

5) 例えば、雲南人民出版社版『中国現代文学史』1981年6月、は『女神』が収録するのは「16年から21年まで」(120頁)と書き、林志浩主編『中国現代文学史』(上)、中国人民大学出版社、1979年9月、は「1918年~21年」(121頁)としている。

6) 姜涛『“新詩集”与中国新詩的発生』(61頁)、北京大学出版社、2005年5月

7) 「白話」は口語(話し言葉)を基礎にした文章語で郭沫若らの使った白話が、現代中国語の基礎になっている。「新詩」は文言で書かれ、押韻など厳しい形式的制約のある絶句、律詩など定型の「旧詩」に対して、そうした制約のない白話自由詩を言う。

8) 程光燦等編『中国現代文学史』(114頁)、中国人民大学出版社、2000年7月

9) 朱光燦『中国現代詩歌史』(153頁)、山東大学出版社、1997年1月

10) 本節は、拙稿「日本における郭沫若研究90年」熊本学園大学『文学・言語学論集』第16巻第2号、2009年12月、による。

失っていた日本の前に、新生社会主義国家として登場したことで、日本知識界に中国に対する関心が高まり、それにともなって中国現代文学にも強い関心が寄せられた時期である。

知日派知識人で新政権の副総理の地位についた大物政治家・郭沫若に対しても、日中関係の閉塞状態を打破し、発展させてくれるだろうという期待が、日本の各界にみなぎっていた。郭沫若もその期待に応え、日本からの各界の友好訪中団を幅広く接見し、日本で最もよく知られる中国人の一人となった。55年12月には中国学術代表团団長として訪日、各地で熱烈な歓迎を受ける。

こうした状況を背景に、郭沫若の作品の翻訳、紹介が進んだ。53年には小峰王親・桑山龍平共訳『郭沫若作品集(上・下)』(青木書店、12月)が出版され、郭沫若の主要な文学作品が翻訳された。54年『現代中国文学選集』(全15巻、河出書房)が、62年には『中国現代文学選集』(全20巻、平凡社)が出版され、前者の第2巻、後者の第5巻、第15巻が郭沫若の小説、伝記等に宛てられた。このほか、須田禎一により詩(『郭沫若詩集』未来社、52年)、戯曲(『屈原』未来社、52年、『虎符』未来社、53年、『蔡文姬』新読書社、59年、『則天武后』平凡社、63年、『棠棣花』海燕社、66年など)が陸続と翻訳された。彼の学術著作としては『十批判書』が野原四郎他訳『中国古代の思想家たち』の題名で岩波書店から刊行(上巻、53年、下巻、57年)され、主要な伝記作品も岡崎俊夫(『亡命十年』(海濤)、筑摩書房、53年、『抗日戦回顧録』(洪波曲)、中央公論社、59年)や松枝茂夫(『創造十年・続創造十年』岩波文庫、60年、『私の幼年時代・辛亥革命前後・南昌の一夜』平凡社、62年)によって次々に翻訳された。

郭沫若が研究対象となるのは、上に述べたような一種の郭沫若ブームとっていい状況の中においてである。50年代以後、学会誌や大学紀要に彼を主題とした研究論文が発表されるようになる。工藤篁「屈原と阿Q」(『現代中国』15、現代中国学会、53年)、服部隆三「郭沫若の小説」(『天理大学学報』5-3、54年)、陣ノ内宜男「郭沫若の『女神』について」(『東洋文学研究』2、早稲田大学、54年)、田仲益見「郭沫若の作品より 孔子、孟子、老子」(『横浜市立大学論叢』6別冊、1954)、中田善勝「一九二四年頃の郭沫若」(『中国文芸座談会ノート』4、九州大学中国文学研究会、55年)、田中巖「郭沫若の戯曲」(『漢文学紀要』5、広島支那学会、56年)、竹内実「郭沫若の歴史劇」(『文学界』13-9、59年)、柴田稔「郭沫若の『蔡文姬』」(『関西大学文学論集』9-8、60年)、清水栄吉「歴史文学における史実とフィクション 郭沫若の史劇論から」(『中文研究』2、天理大学、62)、横山永三「郭沫若の詩集『女神』についての私見」(『山口大学文学会誌』13-2、62年)小峰王親「郭沫若年譜」(『法政大学教養部研究報告』7、63年)、高田昭二「歴史劇における郭沫若の創作態度の変化について」(『岡山大学法文学部学術紀要』17、64年)、実藤恵秀「中国文字

改革の新段階 郭沫若の所論を中心にして」(『文学』32-7, 岩波書店, 64年), 秋吉久吉夫「郭沫若詩集『女神』の成立過程」(『目加田誠博士還暦記念中国学論集』, 64年)など小説や歴史劇を中心にした多彩な研究論文が現れた。これらの論考はいずれも彼の作品の専論である。また, 佐藤一郎「郭沫若論序説」(『三田文学』43-8, 53年)および「郭沫若」(竹内好・岡崎俊夫編『現代中国の作家たち』和光社, 54年)のように, 文学者・郭沫若の成立を伝記的に論述した著述も現れた。

今から振り返ればそれは, 日本の中国現代文学研究が一つの専門的学術領域として成熟しはじめた時期でもあった。『女神』の研究もこの時期から始まるのである。

3. 日本における『女神』研究

3-1. 初期の研究

『女神』研究の最も早いものは前述した, 陣ノ内宜男「郭沫若の『女神』について」(『東洋文学研究』2, 早稲田大学, 54年)であろう。陣ノ内のこの論文は, 『女神』の特色は, 1) 自然の厳しさ, 2) 自然への親愛の情, 3) 人間の悲哀, を近代人の感覚で描き出した点にあり, その詩歌には人生の寂寞, 人間の苦悩が底流しているが, 郭沫若はそれらを人間の精神によってではなく, 社会の変革によって克服しようとしている, と述べている。後の研究で明らかにされる『女神』の成立に関わる諸問題(『女神』執筆時期に彼が影響を受けたと書いている西欧作家や有島武郎らの影響の問題)が見逃されているが, 自身の感性によって『女神』の詩群を読んだ『女神』観賞として評価できる。このような『女神』論はその後現れないのである。

60年代になって, 横山永三「郭沫若の詩集『女神』についての私見」(『山口大学文学会誌』13-2, 山口大学, 62年)と, 秋吉久紀夫「郭沫若詩集『女神』」の成立過程」(『中国学論集 目加田誠博士還暦記念』64年)が書かれた。

横山論文は, 郭沫若はタゴール, ホイットマン, ハイネらから影響を受けて『女神』を創作した。当時の郭の精神はほとんど西欧化しており, 『女神』はその西欧化精神の所産だ, と述べている。横山論文の根拠となっているのは『創造十年』のみであり, その点で結論はやや武断的であるが, 少なくとも『女神』執筆期の郭沫若の視野に同時代の日本文化や思想が入ってきていないように思われる(それに言及した文字がない)ことなどを考えれば, 横山の論文はある真実を指摘しているかもしれない。

秋吉論文は, 郭沫若の作詩の経歴を, 彼の著述を引きながら克明に跡付けたものである。秋吉は, 彼の詩作に最も決定的な影響を与えたのは有島武郎の『叛逆者』で, 郭の中の漠然とした生来の叛逆的性格が, 有島の著書によって理論的支持を与えられたと主張している。秋吉のこの論文は日本における『女神』研究の出発点となったものと言っていいだろう。ただ私は秋吉の結論にも横山論文に感じたのと似た感想

を禁じえない。秋吉にはこのほか「郭沫若のロマンチズムの性格」(『近代中国の思想と文学』大安書店、67年)がある。

3-2. 70年代の研究

70年代に『女神』研究を推進したのは鈴木義昭である。鈴木は72年に、「『瓶』・『前茅』時代の郭沫若 - 政治から抒情へ」(『東洋文学研究』20, 早稲田大学, 72年)を発表したのを初めとし、「郭沫若におけるドイツ文学 ゲーテとハイネ」(『早稲田実業学校研究紀要』8, 73年)、「郭沫若『女神』 模索と到達点」(『早稲田実業学校研究紀要』9, 74年)、「郭沫若『女神』とホイットマン 有島武郎を軸として」(『中国古典研究』20, 早稲田大学, 75年)など、初期郭沫若詩をめぐる論文を次々に発表した。その主な関心は、郭沫若における欧米文学の影響の内容を明らかにすることである。

において鈴木は、ヨーロッパ文学の受入型に「魯迅型」(世界の非主流文学を受容)と「森鷗外型」(主流文学を受容)があるという竹内好の指摘と、「魯迅型」(現在を否定することで不断に前進し続ける)と「郭沫若型」(常に新しい将来に目を向ける)があるという丸山昇の見解を紹介し、二人の指摘を肯定して論を始めている。そして郭沫若のドイツ文学受容には当時の日本におけるドイツ文学観(ゲーテ、ハイネを重視)や高等教育におけるドイツ語重視が関係していると見ている。より内面的にはゲーテ「ファウスト」によって自らの最初の妻との愛なき結婚を浄化しようとする意図があったと考えている。またゲーテへの親近がその「疾風怒濤」=「旧時代否定」の精神によるとも考えている。ハイネについては革命詩と恋愛詩の二つの傾向があるが、初期のハイネ受容は「恋愛詩」に傾いていた。ゲーテとハイネは初期の彼の文学に大きな影響を与えた。後年、郭はゲーテを否定するようになるが、ハイネについてはその影響を自覚していない。しかしハイネは詩的発想法の点で郭の詩に大きな影響を与えている、というのが鈴木結論である。

で鈴木は『女神』の作品群を時代別に、第1輯・詩劇の時期、ゲーテ傾倒期、第2輯・ホイットマン傾倒期、第3輯・タゴール、ハイネ傾倒期および政治詩(ただしここには最初期から『女神』出版直前までの作品を含む)のように分類し、考察を加え、『女神』の作品群には後の彼の活動(文学だけでなく歴史研究や政治活動もふくむ)の中で開花するものが、可能性として含まれていた、と結論付けている。

はホイットマンから文学活動のみならず、人生の歩みについても強い影響を受けた有島武郎と、その有島を介してホイットマンに傾倒した郭沫若の、二人のホイットマン受容を比較したものである。鈴木は「二人ともホイットマンによって、人間をありのままに認め、ありのままの自分を肯定する精神を学んだ」としつつ、有島にとってホイットマンが彼の人生の師、「思想的根拠」「魂の恩人」となるほど傾倒したのに

対し、郭沫若にとってのホイットマンは彼が「探し求めていながら得られなかった」「新体詩」(『三葉集』)のモデルの一つにすぎなかった。タゴール、ハイネ、ゲーテなど彼の西欧文学傾倒の対象の一つであった、と指摘する。有島研究者の山田昭夫は「行動的積極的 loafer」(loafer = 自由人, 放浪者)と「観念的消極的 loafer」という二つの反逆者の類型を設定したが、鈴木は郭沫若は前者であり、有島は後者である。そして「行動的積極的 loafer」としても郭沫若の姿は『女神』以後の政治への傾斜に見出すことができると述べている。

80年代は管見の限りでは『女神』の専論は見当たらない。

3-3. 中国人研究者の研究

90年代以後、21世紀にかけては郭沫若研究に前進が見られた。その顕著な特徴は、個別の作品や、理論への実証的な研究が増えたことである。また、研究の担い手に日本の大学で教鞭をとる中国人や大学院に学ぶ中国からの留学生が増えたことである。彼らはいずれも中国語を母語とするが、日本語に巧みであって、日本で研究者としての訓練を受け、現在は大学や研究機関に職を得て研究者として活躍しているのである。これは文革後の政治・経済・文化の各方面における日中関係の深まりによってもたらされた新しい変化の、日本の中国学研究における反映である。『女神』研究についても、上述の特徴ははっきりしている。その主要なものを列挙すると、理論研究に関しては以下の論文がある。

顧偉良「日本留学期<1914 - 1923>の郭沫若(1) 自我の形成と詩の方法に関する一考察」および「日本留学期<1914 - 1923>の郭沫若(2) その「生の苦悶」と「内面生活」」(『弘前学院短期大学紀要』28~29, 92~93年)がある。

において作者は『女神』時期の詩を素材に彼の「自我観」の形成と詩の方法を考察した。作者によれば郭は「宇宙における生命力の探求」を文学的モチーフとし、「古い形骸を破壊して新しい生命力の充満する新世界を創造する「我」の力を追求し」その一方で「自我確立」を求めたが失敗した、と述べている。顧氏にはほかに「ロマン主義から「革命文学」への情熱 創造社をめぐって」(『国文学 言語と文芸』105, 1990年)、「郭沫若と『文芸理論』の構想 『創作過程』をめぐって」『野草』52, 93年、「郭沫若の『文芸理論』の構想 『感応過程』を視座に」『中国研究月報』49(8), 95年)などの論考がある。

姚南「郭沫若と初期文芸思想の形成 外来文化受容の要件に関する一考察」(『国際学論集』28, 92年)は郭沫若の汎神思想を扱った論文で、直接『女神』を論じたものではない。姚の主張の要点は、郭沫若は日本留学初期にタゴールやスピノザなど外来思想の影響を受けて汎神論者になったというのは間違いで、「郭沫若は日本に留学する以前の「旧学」修業時代に、すでに汎神思想の風土(たとえば荘子、王陽

明)の中にいた。だからこそ日本留学で外来の汎神論に触れたときそれに熱中し、すばやく受容することができた」というものである。

3-4. 作品研究

次に、作品研究では、まず林叢 = 藤田梨那の以下の諸論文を挙げなければならない。

「郭沫若の新詩『電火光中』論 ミレーの絵画にふれつつ」1~2(『二松学舎大学人文論叢』56~57, 96年), 「郭沫若と朝鮮 - 「狼群中一隻白羊」を中心に」(『国土館大学文学部人文学会紀要』33, 00年), 「郭沫若の「天狗」論」(『国土館大学文学部人文学会紀要』36, 03年)がある。

は「電火光中」を構成する三首の詩が、ミレーの「夕暮伴帰羊」と「牧羊少女」という2枚の画から受けた感銘によって生まれた、という視点から書かれた、比較文学的な手法による作品論である。この論文の特点の一つは日本におけるミレー受容に触れている点である。『女神』を論ずる者で有島武郎の『叛逆者』の影響に触れない者はいないが、そのほとんどはホイットマンの影響であって、ミレーに触れた者はなく、高く評価できる。

は『女神』に収録されていないが、『女神』収録の「勝利的死」と同時期に執筆されており、主題も同じであるので取り上げる。藤田はこの詩のもとになった新聞記事を探し出し、それに基づいてこの論文を書いている。藤田は「悲壮」と「聖潔」をキーワードとして作品を分析している。藤田によれば、郭沫若がこの事件に注目したのは、朝鮮問題は民族存亡に関わる問題で、中国の問題でもあったからである。アイルランド独立軍指導者・マーク司威尼の絶食死を書いた「勝利的死」と同じく弱小民族の独立と自由をテーマにしている。これは『女神』のテーマの一つでもあり、彼の初期詩歌の詩風を示している。

は「天狗」を「解剖室中」と比較しながら分析した論文である。藤田はこの2首の詩はともに「解剖」をテーマにしていると考える。「天狗」は生きた肉体の解剖を叙述し、「解剖室中」は死んだ肉体の解剖を叙述しているというのである。医学学生郭沫若にとって、解剖実習という体験は、彼に自然・社会・宇宙を審視する新しい視点をもたらすことになった。「天狗」は詩人が目指した自己完成の境地と、彼が味わった自我精神の高揚感を描いている。これは同時に『女神』の重要なテーマでもある、というのが藤田の主張である。

次に『女神』時期の郭沫若の福岡における実生活を克明に調査し、その実生活との関わりで『女神』を考察しようとしているのが武継平である。武継平は郭沫若の母校で学ぶという優越性を生かして、人文地理と社会史的な視点から『女神』時期の郭沫若の位置を明らかにした。彼の論文には、「異文化の衝突と融合 郭沫若の『女神』とその時代」(『比較社会文化研究』3, 九州大学, 98年), 「福岡における郭沫

若」(『九州中国学会報』36, 98年),「郭沫若の『星空』論 “五四”退潮期における苦悶と思索」(『比較社会文化研究』4, 98年),「郭沫若の初期文学論考」(『比較社会文化研究』5, 99年),などを書き,それらの基礎の上に博士論文をまとめ,『異文化のなかの郭沫若 日本留学の時代』(九州大学出版会,02年)として刊行した。

はこれまで明らかにされてこなかった福岡における郭沫若一家の「暗くて惨めな」実生活の実証的研究であり,『女神』がどのような生活の中で書かれたかを明らかにしている。

は『女神』のみならず留学時期の郭沫若に関する,日本で初めての単行本であり,日本の郭沫若研究を一步前進させる役割を果たしている。その第7章「『女神』の時代」はおそらく日本で最初の最も全面的で詳細な『女神』論である。ここでは,その目次を摘要することで内容紹介に代える。第1節「作品の再分類」/第2節「時代精神との接点」/第3節「『女神』の位置づけ」/第4節「暗黒と光明の熾烈な闘い 暗黒を呪い,光明を讃える『女神』」/第5節「「自我」の賛歌,「大いなるもの」の志向」/第6節「愛国主義詩想の底流」/第7節「『女神』と博多湾」/第8節「新旧軼詩および『三葉集』からみた『女神』」/第9節「汎神論思想の独自性」/結語。

武継平自身は,第1節,2節,7節,8節を「新しい視点」と書いているが,それらは確かに諸家がほとんど論じていない『女神』論であり,岡山六高時代の詩作の考察,および『三葉集』と『女神』所載の福岡時代の新詩との関連を明らかにしている点,博多湾など福岡の自然と詩作の関連を明らかにしている点,『女神』収録作品の上限とされている「死的誘惑」など5首の新詩について,これを博多時代の作としている考証(第6章)などに特色がある。

武はその後も着実に研究をすすめて「郭沫若の「女神の復活」と魯迅の「不周山」」(『言語文化論究』18,九州大学,03年),「『女神』に見られる伝統詩形の伝承と乖離」(『言語科学』39,九州大学,04年),「郭沫若の『女神』創作期の逸詩文 作品の翻訳と解題」(『言語文化論究』19,九州大学,04年),などの論文を発表している。

は郭と魯迅の作品を,取材した神話,創作方法,ストーリーの展開の3点から比較分析したもので,「女神の再生」は啓蒙的価値は高いが文学の完成度としては,「棠棣花」「湘累」「孤竹君二人」には及ばない。「不周山」は,儒教的伝統文化への批判と国民性改善への希求が主題で,必ずしも現実とは結び付かないが,文学的価値は高い,と結論付けている。は五七言句の音数律,句と行の規則,西洋詩法の応用という3点から『女神』を考察し,外形的要素からみると『女神』の8割以上が西洋近代詩の影響を受けていて,『女神』の詩形は西洋製・模倣品だとしている。ただ郭は完全な旧詩も書いており,それは伝統継承の意志を示すと考えている。

この時期,もっぱら『女神』について研究をすすめてきた者には,他に賈笑寒と横

打理奈がいる。二人とも当時大学院学生だった。(賈は大阪外国語大学, 横打は東洋大学)

横打は、『女神』の版本四冊について文字の異同と改作の位置づけを論じた「『女神』の版本について」(『東洋大学中国哲学文学科紀要』7, 99年), 主として『女神』収録の作品を例に, 旧詩との関わりで郭沫若詩を論じた, 「郭沫若の新詩誕生を探る旧詩の考察から」(『東洋大学中国哲学文学科紀要』10, 02年), 郭沫若と閻一多の神話・伝説に関する立場の違いを論じた「郭沫若『女神』にみる神話回帰の態度」(『神話と詩』3, 日本閻一多学会, 04年)があり, また「郭沫若と『楚辞』 「晨安」に見る飛翔を手掛かりに」(『神話と詩』5, 06年)がある。は従来ホイットマンの影響が指摘されていた「晨安」について, それは詩形においてはホイットマンを参考にはしたが, 同時に『楚辞』の「離騷」や「遠遊」の魂の彷徨というテーマを骨組みとして具体的な作品としたと指摘する。そして「晨安」はホイットマンの現代的表現を借りた「現代の屈原」郭沫若の「離騷」への返歌といえるのではないかと、という視点を提起している。「郭沫若と宮澤賢治 詩人と科学」(岩佐・藤田・武編『郭沫若の世界』花書院, 10年7月)は大正期に興った「科学と文学」という新しい文学思潮を背景に, 宮澤賢治の詩と郭沫若の作品の「光」と「音」を論じている。後で紹介する小崎太一の海水浴の考察とともに, 今後の郭沫若研究に新しい道を開くものと思う。

賈笑寒の論文で管見に入ったものは, 「郭沫若「湘累」と精神病理学」(『野草』73, 中国文芸研究会, 04年), 「郭沫若「女神之再生」とゲーテ『ファウスト』」(『現代中国』78, 日本現代中国学会, 04年), 「郭沫若『女神』にみるタゴール, ホイットマンの影響」(『EXORIENTE』11, 大阪外国語大学言語社会学会誌, 04年)である。彼女の論文はほかにも読んだ記憶があるが, 手元に資料を欠く。は「湘累」論である。作者によれば, 郭沫若は精神分析の方法を用いて屈原を分析し, 「離騷」「九歌」などから, 精神の抑圧された屈原像を読み取り, その屈原像を「湘累」に形象化した。『女神』は医学生から文学者に転身する郭の成長の記録であり, 「湘累」もその記録のひとつである。は「女神之再生」の冒頭にゲーテ『ファウスト』の「神秘の合唱」が引用されていることの意味, 郭沫若の『ファウスト』観が「女神之再生」創作に与えた影響などを考察している。賈によれば郭訳『ファウスト』は必ずしも原文に忠実ではなく, 極めて主観的である。「神秘の合唱」で郭が「永恒之女性, 領導我們」と訳している2行も誤訳である。郭は自分の主観的な解釈に基づいて「永恒之女性」に民主平和平等の精神を象徴させ, それを中国神話の女神に結び付けた。その女神を再生させることで, 戦乱の中国を再生させるのは民主平和の精神しかないという考えを訴えようとした, というのが賈の結論である。

②1 戴煥「郭沫若におけるタゴール評価の問題 その詩人像の変遷を通して」

(『アジア遊学』3, 勉誠出版, 06年)は、詩人・郭沫若の誕生にタゴールは大きな役割を果たし、「人格論」を中核にしたタゴールの文学論も郭沫若の有力な理論的支えだった。だが1924年タゴール来華直前、タゴールを批判するようになる(「タゴール来華の私見」)。この論文はそれを論じたものである。作者によれば、この時期タゴールの詩と詩論を基盤に築き上げられた郭沫若のロマン的詩人像はすでに崩壊していた。だが、タゴールが詩人としての自己確立に余りにも重要な存在であっただけに、郭沫若は彼を批判することによって、それまで歩んできた道を見直した上で、それを乗り越えねばならなかった。この論文は『女神』以後の郭沫若のタゴール評価を主題としている。郭沫若が詩人としての自己確立時期に影響を受けた多くの外国詩人たちについて、後年、どう評価するようになったのか、というのは郭沫若研究の上でまた一つの課題だと思う。この論文はそのきっかけを与えてくれている。

『女神』の語彙という視点から『女神』を論じようとしている論文に、②山本明「新詩語」の形成 郭沫若の「悲哀」をめぐる(『早大大学院文学研究科紀要文学芸術学編』早稲田大学, 93年)がある。山本は『女神』中に出現する「悲哀」という語の用例を検討し、それが明治20年代に展開された「悲哀の快感」をめぐる論争、30年代後半、象徴詩の紹介を通じた「悲哀」の称揚、40年代の自然主義の表現目的となった「悲哀」このような明治文学の流れの中で定着した「悲哀」という文学用語に、郭沫若は「自我意識の苦しみ」という新しい内容を付け加えたのではないか、という仮定を述べている。『女神』の詩語をこのように当時の日本文学の環境の中に置いて検討するという視点は、重視すべきだと思う。

郭沫若詩の題材について研究している者には、上に紹介した藤田梨那のほかに岩佐昌暲がいる。岩佐は③「福岡滞在期の郭沫若文学の背景その他」(『言語文化論究』17, 九州大学, 03年)で、九州大学交響楽団史料に基づき「在演奏会上」が1919年11月15日福岡市記念館で開催された九州帝国大学交響楽団10周年記念第15回秋期演奏大会であることを明らかにした。また福岡気象台の記録を根拠に「雪朝」の日時を推定した。また筆立山への実地登山によってその人文地理的状况を明らかにした。ほかに「初期郭沫若詩「晴朝」の風景」(『郭沫若研究会報』4, 04年)でこの詩が福岡市東公園をうたったものであるとし、「郭沫若のロマンチズム 「炉火煤」から思いつくこと」(『郭沫若研究会報』9, 07年)でこの詩誕生の背景を述べた。これは作者自身が言うようにいささか「玩物喪志」を免れないが、福岡に在住する研究者にしかできない研究であり、『女神』研究の不足を補うものである。

また小崎太一には『女神』与遊泳(岩佐・藤田・武編『郭沫若の世界』花書院, 10年7月)がある。「浴海」などの背景になっている福岡における海水浴についてのユニークな実証であるが、このような論文は今後の『女神』研究の一つの方向を示すと思う。

以上はいずれも『女神』の成立をめぐる研究と言っていいだろう。『女神』の作品を文学として考えようとする論文に、²⁴ 中裕史「郭沫若の「豪放」と「繊細」詩型との関連から」(『アカデミア 文学・語学編』71, 南山大学, 02年)がある。作者は、郭沫若の詩については従来、語彙や思想の面で西欧化が強調されてきたが、旧詩との関連にも注意すべきだという立場に立脚している。この論文は『女神』と『星空』『瓶』とを比較し、『女神』は豪放である。形式、精神面で新しく、豪放な海のリズム、潮のリズムを言葉で再現している。だが海には繊細さ、静けさもあり、静寂の中に美を現す。『星空』はそれが中心である、と論じる。

このほか、『女神』をめぐる研究には、鈴木義昭「聞一多と郭沫若 聞一多の『女神』評価をめぐる」(『神話と詩』7, 08年)など少なくない論文があるが、主なものはだいたい紹介したので、その他の論文の紹介は割愛する。

3-5. 翻訳・その他

郭沫若の詩作品の翻訳紹介は1919年10月天津で発行されていた日本語雑誌『日華公論』に掲載されたものを嚆矢とする。「児を抱いて博多湾に浴す」「鷺」の2首であるが、これはその1か月前上海の『時事新報』副刊「学灯」に発表されたものであり、その反応の速さに驚かされる。以後彼の詩は断片的、断続的に翻訳されてきた。まとまった形で翻訳が出るのは須田禎一『郭沫若詩集』未来社、1952年10月が最初であるが、『女神』の全作品が訳されているわけではない。須田の『郭沫若詩集』は、その後、雄渾社版『郭沫若選集』の第5巻(77年7月)にも入っている。ほかに彭銀漢『対訳郭沫若詩集』花曜社、1982年6月、があるというが、未見である。日本語全訳は、ようやく今年、藤田梨那によって完成出版された¹¹⁾。この翻訳は、「我」をすべて「われ」とするなど、訳語に訳者独自のポリシーが感じられるが、その妥当性については検討が必要だと思う。しかし、ともかく本訳書によって『女神』の全体像を日本語で読むことができるようになった。郭沫若研究への大きな貢献であり、それを喜ぶとともに藤田の労を多としたい。

ほかに、研究書ではないが大高順雄・藤田梨那・武継平訳『桜花書簡 中国人留学生が見た大正時代』(東京図書出版会、05年)も、日本留学時期の郭沫若が故郷・樂山の父母に宛てた書簡を訳したもので、貴重な仕事であり、『女神』理解に資する仕事である。

本稿でふれなかった『女神』に関する研究や個別の詩作品の翻訳については、近刊

11) 藤田梨那訳『女神』明徳出版社、2011年4月。

12) 岩佐昌暲・藤田梨那・岸田憲也・郭偉編『日本郭沫若研究資料総目録』明徳出版社、2011年4月。

『日本郭沫若研究資料総目録』¹²⁾を見られたい。

4. 日本の『女神』研究の成果と不足

以上、日本における『女神』研究のうち管見に入った主要な成果を通観してきた。以下、成果の感想を述べてみたい。

日本の『女神』研究の特色は、詩集を構成する個々の作品の鑑賞や作品自身の分析といった、文学研究の本道たる作品研究が少ないということである。研究の多くは、彼に影響を与えた外国詩人と彼の初期作品との関連、特にタゴール、ホイットマン、ゲーテ、ハイネなどとの関連の研究で占められている。換言すれば『女神』成立をめぐる研究＝『女神』の外的研究は盛んだが、内的研究＝『女神』の文学性についての研究が少ないように思う。また、外的研究にしても、上記西欧作家との関連、影響関係についての研究は多いが、日本との関連、日本文学との関連、影響関係についての研究は(有島武郎を除いて)ほとんどないことに気づく。もっとも、これは郭沫若が自分の詩作について語っている「我的詩作的経過」や「創造十年」の記述を第一資料にする限りやむを得ないという側面もある。彼が具体的に名をあげているのがタゴール、ホイットマン、ゲーテ、ハイネ、有島武郎などで、郭沫若自身がそれぞれに大きな影響を受けたと言明しているからである。

だが、今後は研究の重点を上記述べた「内的研究」に移す必要があるだろう。具体的には、1) 個々の作品についての研究(作品論)がもっと必要である。日本で研究するという優勢を生かし、個々の作品の材源(=作品の素材)や成立背景を明らかにし、それを基礎にした作品研究をする必要があると思う。

次に、2) 日本文学との関連、影響関係についての研究が、もっとなされなければならないと思う。例えば、郭沫若が影響を受けた西欧作家たちについては、郭沫若の留学中に日本ではその受容のブームが存在したのであり、そのブームが郭沫若にこれら西欧作家への関心を抱かせたとも言えるのである¹³⁾。日本の研究者はそういう点にもっと目を配り、「日本における西欧文学の受容」という視点から、郭沫若の西欧作家への接近の問題も考える必要があると思う。

13) 例えば、タゴールは1913年ノーベル文学賞を受賞したが、16年日本を訪問、朝野の熱狂的歓迎を受け、その動静が日々新聞に大きく報道された。ホイットマンについては、郭沫若の作詩熱の高揚期の1919年がその生誕100年記念であり、文壇で大きく取り上げられたほか、白鳥省吾と富田砕花による『草の葉』訳詩集がそれぞれ出版されている。ゲーテは、明治20年代から『ウェルテル』読書熱があったようだが、1913年森鷗外による『ファウスト』訳が発行直後から大変な売れ行きを示したという。このゲーテ熱はその後も長く続いている。ハイネは1920年『ハイネ全集』第1巻『小曲集』が出版されている。以上、いずれも日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』講談社、1997年11月刊。320-410頁の当該項目による。

また、大正期の思想・文化との関連も重要である。大正期の日本に留學生活を送り、日本人の妻をめぐった郭沫若が、大正期日本の思想、文化に影響を受けなかったはずはないからである。にも関わらず、この面からの郭沫若研究が行なわれてこなかったのは、郭沫若自身が大正期の日本の思想、文化について言及していないからである。28年以後の亡命生活時代は別にして、留學時代の彼の文章には有島以外の日本作家の名は一人として出てこない。このことはそれ自身が郭沫若研究の主題たりうると私は考えるが、今は述べない。

さて、前述したような、郭沫若と日本との関連については、中国ではすでに蔡震のすぐれた研究がある。『文化越境的行旅 郭沫若在日本二十年』文化芸術出版社、05年3月出版、がそれである。本書は、日本文学、日本思想、日本の風俗習慣に関する幅広い知識と理解、強い関心のもとに書かれていて、単なる郭沫若論ではなく、すぐれた日本概説、日本文化論という側面をもつ。この本の第2章「宇宙全体只是一部偉大的詩篇」(「全宇宙は偉大な詩にすぎない」)は『女神』について書かれた章だが、そこに展開される蔡震の問題意識に私は同感である。最後にこの書物を読んで私が共感した点を引用し、本稿の結びとしたい。例えば、彼はこう書いている。

「私はこれまでずっとこう考えてきた。日本文化が『女神』の創作に痕跡、ないし文化学的な意味での影響を残していないはずがない。それらは、タゴール、ホイットマン、ゲーテによって、ヨーロッパのローマン主義、表現主義あるいはその他の何何主義文学の強烈な色彩によって覆い隠されていたにすぎない。そこで、人々は明らかですぐ分かるものを無視していたのだ。」(44頁)

これに続けて彼は「人々はこれまで『女神』の創作と欧米文化、欧米文学との関係に注意してきた。だがわたしはそれは一つの誤解だったと思う」とまで言う。彼の精彩な日本論はここから始まるのだが、それは割愛する。

さて、私が蔡震の指摘に最も感心し、また共感したのは以下の部分である。

「従来『女神』の創作について論じるとき、人々は郭沫若の身分を五四文壇の最新詩人としてきた。しかし五四新文学史上、最初の真の新詩集とされる『女神』は、一人の留學生が日本の九州博多湾のほとりで創作し成ったものだというこの一点は、これまで誰にも意識的に考えられたことがなかったようである。(中略)ただの海外の留學生というだけの身分は、『女神』と『女神』時代の郭沫若の創作と文学活動にとって、なにか特別な意義があると考えべきだろうか？当然考えるべきである。なぜなら、『女神』の創作は正に詩人が海外に学ぶひとりの学生の眼光、情感、視野をもって、彼の感じた苦悶や疑惑をもって、憧れている希望と理想を歌ったものだからだ。」(42頁)

『女神』が日本で生活してきた、特別な存在としてではなく、一人の普通の学生として生活してきた者によって書かれている以上、そこに日本文化の痕跡がないはずは

ない、という指摘は、いくらでも反論できる論理であろう。だがこの詩集がすでに名を成した詩人によってではなく、まだ何者でもない無名の留学生によって、その留学生の感受した世界を背景に歌いだされた希望と理想の詩歌だ、という蔡震の指摘は重要である。日本の『女神』研究は、武継平の一連の業績がそうであるように、このことをはっきり認識しているものもある。しかし、多くは依然としてこの点に注意を向けていない。あるいは向け方が不十分である。今後の日本における『女神』研究にはこのようなリアリズム(認識)が不可欠であると思う。それは日本研究者の立脚点を生かすことでもあるし、(中国を含めた)今後の『女神』研究を発展さす道でもあると思うからである。(2011年11月30日)